

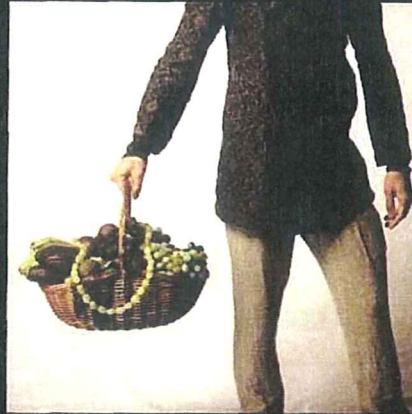


214

Philippe Starck:
the enfant terrible of design
フィリップ・スタルク:
おそろべきデザインの申し子

(質問) なぜ彼は天才なのか。なぜスーパースターと呼ばれるのか。答えなさい。
(ヒント) ジャンルを超え、これほど成功を収め続けているデザイナーは他にいない。
だがそれは解答にあらず。答えは彼のみぞ知る。スタルク、奇跡のインタビュー。

Portrait : Jean-Baptiste Mondino Interview&Text : Jonathan Wingfield
Translation : Yoko Amakawa



—— 伊勢丹や金沢21世紀美術館からの指名のいきさつは？
美術館のキュレーターの方がアートやデザインに踏み込んだ食の表現者を探していた。伊勢丹も食品のエキスパートの方たちが「食を取り巻く状況が、デザインやアートのように感

珍しい食材はそれだけで目新しい印象を与えやすいので、極力、普通の食材を使って、状況や組み合わせで新しく見せたいと思っています。
—— 料理人の経験がなく、もともと編集業を目指していたそうですが、フードによる表現に至った経緯は？
大学で広告デザインを学んだのですが、新しいものが生み出されては消費される世界に違和感を感じて、それよりも既存のものから新しい価値を生み出す編集業に可能性を感じました。いろいろな仕事に携わっているうちに、あらゆる日常の作業にも編集的な視点が存在していることに気付きました。料理を作るのも、今日着る服を選ぶのも、いわば編集なんですよ。
—— D&Departmentとブランドハイアットで働いたのちに、いかにして現在へと至ったのでしょうか？
きっかけは、D&Departmentに在籍の間に、デザイン事務所の知人からパーティーのための大きなケーキを作ってくれる人を紹介してほしいと相談を受けたんです。面白そうだったので、「私がやります」と、直感で引き受けました。実はケーキは作ったことがなかったのですが、それが好評で、続けて依頼が来るようになって、その後、活動を続けながら、ブランドハイアットのハンケット企画に入って、パーティー関連の現場経験を積みました。

性的の方向に向かっている」と感じていたところ、私を見つけたということのようにです。
—— グルメはもはや当たり前、さらに健康食が普及した今、まったく別の感覚による食の楽しみ方を時代が求めているんでしょうね。今後のさらなる展開が楽しみです。
「アートでもデザインでも、グルメでもなく、でもそのすべてである」という、この新しい食の世界をより深めていきたい。あらゆる人が毎日繰り返す「食べる」という行為に対して「空腹を満たす」でも、「おいしい」でもない、新しい価値を切り拓けるとしたら、それはなんて面白いことだろう、と思います。



舘訪綾子 (すわ・あやこ)

1976年、石川県生まれ。フードクリエイション主宰。「そのコンセプト買まで届けます」をキャッチコピーに、パフォーマンスなどの表現活動を行う。最近の主な活動に、101 TOKYO Contemporary Art Fairのオープニングイベント、新宿伊勢丹フードフロアのリモテル1周年記念プレスパーティーなど。www.foodcreation.jp

フードクリエイション 食欲のデザイナー

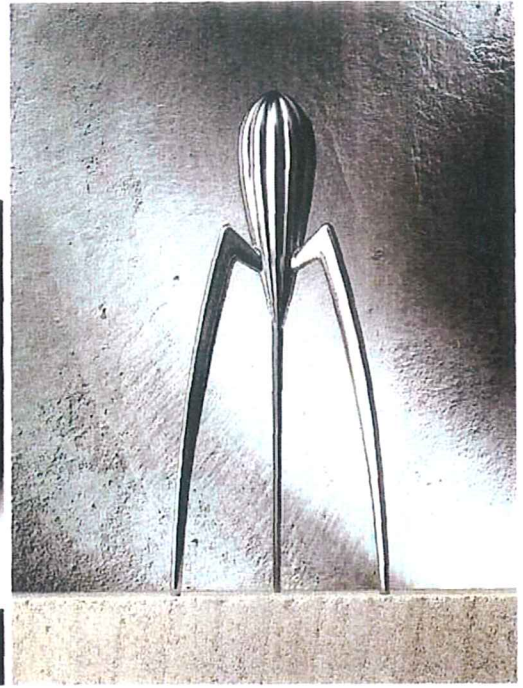
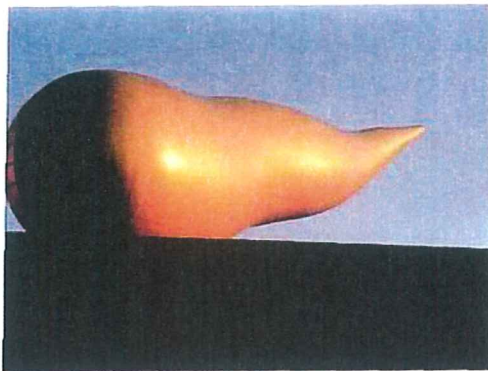
感覚で味わう感性のテイスト

7月19日～9月28日 全沢21世紀美術館・デザインギャラリー

石川県金沢市広坂1-2-1 ☎076-220-2800 www.kanazawa

21.jp 新たな視点である「食欲のデザイン」をテーマに、作品を「味わう」展覧会。なお、会期中の8月22日～9月6日には東京・恵比寿のgallery POINTでも写真家・宮原夢雨との共展を予定。

右から「20世紀を代表するデザイン」と賞賛されたレモン絞り器「Juicy Sali」(Alessi (1990年))、「Toothbrush and Holder」(Fluocanil (89年))、東京・浅草「スーパードライホール」アサヒビール (89年) のモニュメント部分。



「デザインの仕事に嫌気が差した。2年以内にリタイアしたい」——3月27日、「Die Zeit」紙(ドイツ)の記事に、世界が揺れた。が、泡を食った輩には御愁傷様。史上唯一のスーパースター・デザイナー、彼を語り得る者など存在しない。いつもそうだ。ボンビドゥーでの回顧展でも「何も見るものはありません」。彼はまだまだ楽しんでる。そもそも活躍が過ぎてインタビュアー自身が奇跡の男。この記録をどう読むか、私たちにそれが問題だ。

——どのような子どもでしたか?
デザイナーになりたいたとはまったく思っていませんでした。文化的にも知識的にも恵まれない環境でしたから。非常に狭いアパートで母と暮らして、私は床で寝ていました。ただ、家具がまったくなかったからこそ、「デザインとはこういうものではない」という先入観を持つこともなかった。何ものにも左右されないアイデアを生み出すことができる、という私の特権的能力は、こうして育まれたのです。

——初めての作品はなんでしたか?
17歳の頃、車に興味を持ちました。人生で初めて最後のことでしたが、車のドローイングを始めたところ、人間と関わる部分がシートとシャーシからなることに気がきました。それで、車自体よりもシャーシ、そしてシートとのドローイングをするようになり、しまいは家で使用する椅子を描き始めました。こうして私はデザインの世界にたどり着いたのです。
——その頃、デザイン界はどんなところでしたか?
まず、「デザイン」というものは当時まだ存在していませんでした……少

なくともフランスには。1960年代にデザインといえば、それはハイコオリティのイタリア製フロダクトのことでした。つまり、エンツォ・マリー、アキッレ・カステイリオーニ、アルベルト・メダやヴィコ・マジストレットといった巨匠デザイナーによって作られたものことです。悪い意味ではなく、彼らは非常にエリート主義で、彼らが作り出す製品はほとんどもなく高価なため、入手しにくいものでしたね。

——当時、フランスにはデザインはまったく存在していなかったのですか?
TGV(フランスの高速鉄道)のデザイナーを手掛けたロジェ・タロンなど、工業デザイナーが数人はいいましたが、家具のデザイナーにおいてはそう。そもそもフランス人がデザイナーになるという考えすら馬鹿げていた。ましてや、それから40年の間にフランス人が世界のナンバーワン・デザイナーになるなんて、本当にありえないことでしたね。

形だけのスタイルには興味なし——
ライフスタイルの革命こそ私の使命

——あなたの初期のデザインスタイルは、どんなものでしたか?
私はもともとスタイルというものに興味がなく、それよりも生活の中の造形に興味がありました。例えばあなたが座っているその椅子。カテル社の「ルイ・ゴースト」ですが、フォトイユ・レジェ(軽量椅子)の中でも世界的ベストセラーになったものです。ここで重要なのは、人々はそれまでリビングルームでは大きなアームチェアを、ダイニングルームではキッチンチェアを使用していた、という

こと。私にとって、それらはすでに時代遅れのものでした。
つまり、ダイニングルームで食事をし、その後はリビングルームで過ごすのではなく、食事をリビングルームで済ませた後、同じテーブルで過ごすのではなく、ベッドに行けばいいわけで、そこで私は、一つでリビングと食卓用、両方にも使えるものを作り出したのです。その結果、「ルイ・ゴースト」はベストセラーになりました。つまり、デザイナーにとどまらず新しいライフスタイルを提案した、ということですね。

——どのようにしてライフスタイルの改革を提案したのですか?
当時、こういった変革については理解さえしてもらえませんでした。名もなき貧乏人である私に、メーカーたちはこう言いました。「君は才能があるよ。でもこれ売るためのマーケティングがない。世の中はこういう生活をしていないからね」

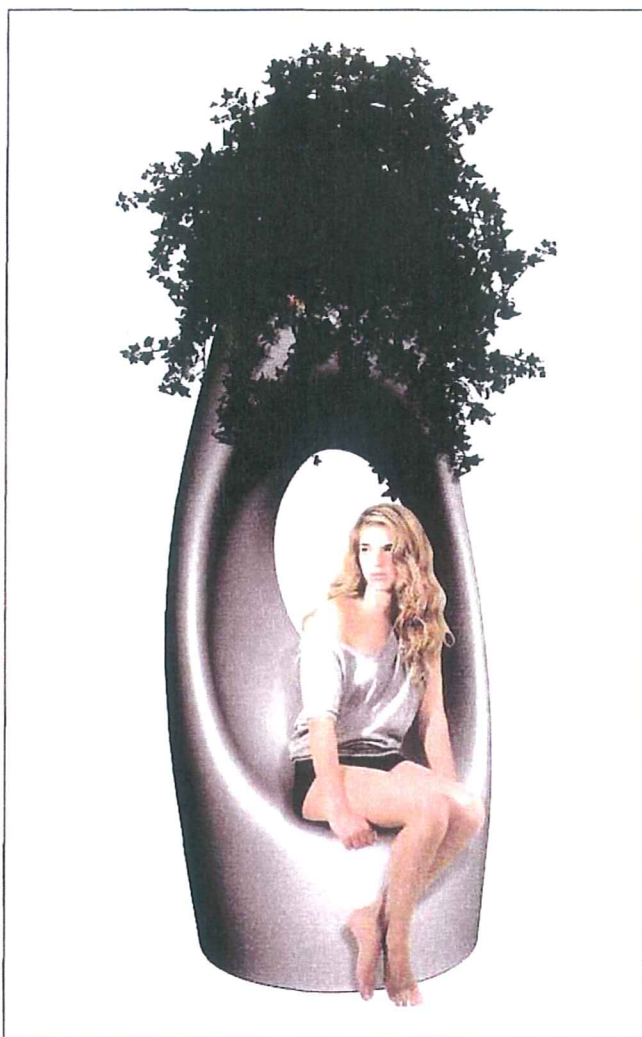
「これからはこういう生活が変わっていくんです」。私は自分の考えを信じながら、問い続けました。「なぜ生活にこんなにお金をかけなければならぬんだらう?」

低コストで良質な製品を大量生産するには、新しい流通のカタチが必要でした。それで私は、フランスで「3 Suisses」や「La Redoute」のようなカタログ・オーダーショッピングのシステムを開発し、それが後にはアメリカの「Z Gallerie」のような大きな流通業者が世界を席巻する状況に結びついたのです。
——こうしてあなたの作品が広まっていったわけですね。
「最良のものを、最大多数の人と与える」という、デモクラティック・デ

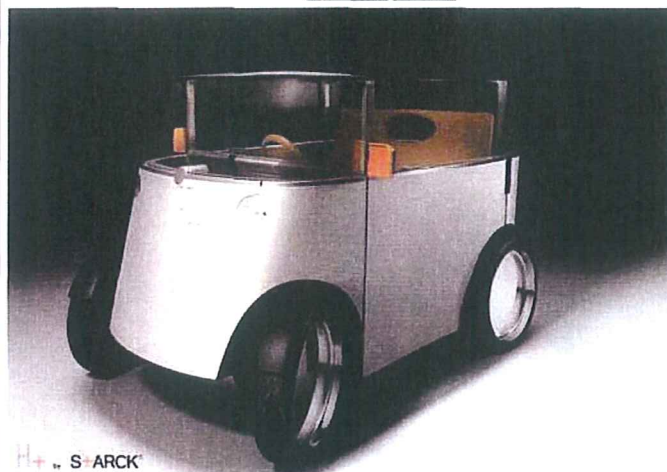


上から時計回りに：アンダーウェア (Starck NAK ED PUMA (2006年)、小人型の椅子シリーズよりコールドの (Gromes-Attila|Kartei|06年)、曲線美を極めたスツール (W.W.Stool|Vitra|90年)





左から時計回りに：今年のミラノサローネ出展作品より2点。プランター「Holly All」Serralunga (2008年)と、ミラー「L'Oréille Qui Voit」XO (08年) Photo : Jean-Baptiste Mondino、自身の構想による電気自動車のデザイン案「H+」(05年)



から「Sunset」の家具のシリーズでは、購入者にまずプラスチックのパーツを届け、メインのパーツを得るためには森に生の木を取りに行かなければならないというデザインを考えました。森の番人がパーツをくれ、森や木々を大切にするにはどうすべきかを教えてくれるのです。

新たな戦いの場はエコロジー！
そして未来へ

——最近のプロジェクトについて教えてください。

私は、大衆デザインへの戦いには勝ちました。今は新たに、デモクラティック・エコロジー（大衆エコロジー）のための戦いに取り組んでいます。アル・ゴアの映画「不都合な真実」を観た人にせよ、今は誰でも歯を磨く時に水道を止めておくとか、電気を消すとか、ゴミを分別することができ、それは素晴らしいことですが、しかし、対症療法では大きな変化は生まれません。

——でも、誰もどうしたらいいかわからないのでは？

これからは違います。私は、大衆デザインと同じ原理を取り入れました。プラマック社とともに家庭用風力発電機を開発していますが、今の風力発電機はとても高価で巨大で醜く、騒音を出しますし、それがどこで購入できるのか、誰も知りません。

新しいシナリオはこうです。ここに一人の男性がいる。悪い消費癖があり、毎週末スーパーに行つては用もないものを300ユーロは買つてしまう。彼はある日、スーパーで新しい商品に気付く。美しく面白そうだな、と思つているところに、それが風力

Philippe Starck (フィリップ・スタルク)
1949年パリ生まれ。カマンド装飾美術学校を卒業後、ピエール・カルダンの家具デザイン部門を経て独立。82年、カフェ・コストとエリセ宮の大統領執務室の設計で脚光を浴び、以後、Alessi、Cassina、Doriade、Kartel、Flos、Vitraなどのブランドから世界的ヒットを連発。作品はホテル王イアン・シュレーガーの益々のホテルから日本のコンビニまで多岐にわたる。名実ともにデザイン界のスーパースター。 www.philippe-starck.com/

発電機だと伝えます。

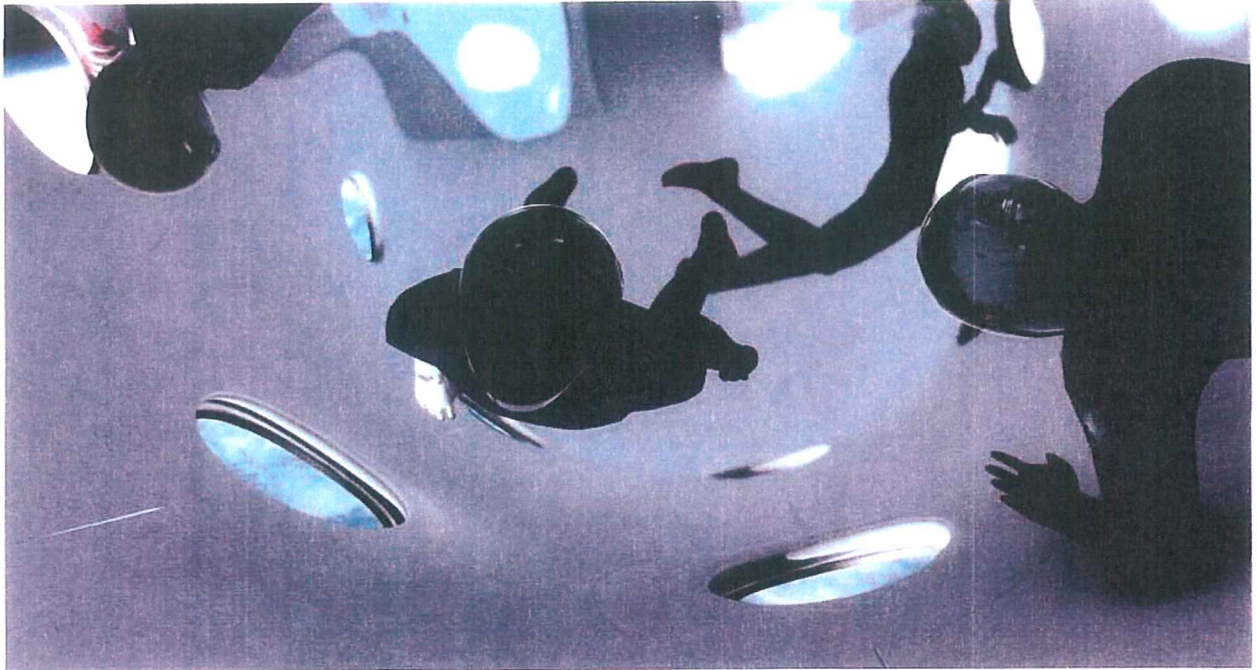
「でも、これで私は何をしようというんだ？」「自宅で自分の電力を生産するので」「でもいくら？」「300ユーロ400ユーロです」「どうやって家に持つて帰れば？」「車のトランクに入るくらい、小さな箱に入っていますよ」——男はそれを購入して屋根の上に設置したところ、使用電力の40%を得ることができました。

お金を節約できるばかりか生み出すわけですから、環境問題に関心がない人でも興味を持つはずでしょう！

休暇で不在の間も発電機は動き続け、電力会社が電気を購入する仕組みです。いわば勝ちまくりの素晴らしい行動ですが、これは今まで私が行ってきたことすべてを総括する試みです。技術を駆使して魅力的かつ購入可能なものを生産してきたことが、人々を現代の生活スタイルへ導き、さらに未来へも誘っているのですから。

——プロジェクトの反響は？

ミラノサローネでの反応は熱狂的でした。プラマック社は数百万台を販売し、すぐにコピー商品が出回るでしょう。でもいいのです。中国では何億台売って初めて、ようやく変革のスタートに立っているわけですからね！



ヴァージン・ギャラクティック社の宇宙旅行
ツアー用宇宙服のデザイン。「様に近い感
覚の宇宙服を」とのこと。同社との契約で
は他にもロコ、米ニューメキシコ州の宇宙
基地、スペースポート・アメリカなどを設計
ルイ・ヴィトンによる旅客用ラゲージもデザ
インと報じられているが、詳しくは正式発表
を待ちたい。www.virgingalactic.com



hand man
男の利き手

たくさんの物事を生み出し、行ってきた“男の利き手”。個性豊かな表情とそこに刻まれたエピソードを通じて、これまで歩んできた歴史の一幕を振り返る。ミュージシャン、トータス松本の“利き手”が語る人生の名場面。

Photo : Kazumi Kurigami Interview & Text : Masaru Hatanaka

220

vol.17 トータス松本 Tortoise Matsumoto

——あらためて自分の手を眺めてみて、どういう印象でしたか？
ユビ毛が生えてますね、曲を作っていないから(笑)。というのも、モノ作りのストレスで、部屋を突然片付けだすことってあるじゃないですか。僕の場合だと曲作りの最中、爪切りから始まり、ユビ毛は一本残らず抜いてしまう。だから、作ってない時期は、ユビ毛がよきよきに生えるんです。それにしても、毛って好き嫌いあるよね。昔やったら「毛の生えた男はイヤ」って、みんなに拒否された。無いなら無いでバカにされるし。でも、最近の女の子は、毛に対してだいぶ好意的になったね。
——そういえば絵をよく描いてるんですね。
今でも描くけど、絵はすごく好き。マトリョーシカにどんどん色を塗ったり。ぬり絵だったら、肌を肌色にしか塗らない子どもに、「顔半分茶色にして。みや、陰影ついてカッコ良くなったやろ！ 白は白に見えるだけで、ホンマはグレーなんや！」って教えてましたね。
——決まり事が多いんですね。
今はマニュアルが多過ぎる。うちの子を風呂に入れてあげた頃の話やけど、よく言うように後頭部を片手で持ち抱え、水が入らないように指で耳を塞ぐやん。でも、彼らはそれぞれ、耳の位置も違えば、僕の小さな手で届きづらい。しかも頭を抱えていると指もつるし。だからもういいやと思ひ、じゃぶじゃぶ洗い始めたんよ(笑)。「水なんか入らへん、入らへん」って。ネコを飼った時でも「ネコは耳垢が溜まります。それにより細菌が増殖し、炎症を引き起こす場合もあります…」とか(笑)。一度

も取らへんかったけど、炎症なんてなかったよ。ああしたほうがよいとか、こうしたほうがよいとかが多い。生後5カ月で子どもをプールへ放り込んだこともある。ニルヴァーナのジャケットの赤ん坊みたいになるかなって。フクフク沈んでも、水中では絶対に息を吸わなかった。それには感動したよ(笑)。今の人が「熱湯注意」みたいな説明書きがないと文句を言う。僕も最初は用心深く見てたけど、「こんなん毎度見てたら、ホンマは何したらいいのかわからなくなる」と思っ止めたね。
——今回、ソコとして初のオリジナル曲をリリースされましたが、どんなイメージで作られましたか？
ドラマ「ホカベン(日本テレビ系)」の主題歌なんですけど、そのシンポジスを読んでいたら、「あの頃、どうやって暮らしてたやろ…」と、年代をさかのぼった自分と主人公が重なり合った。それから、どんどんリアルに思い描いて「涙をとどけて」ができました。僕もいい大人ですが、一週間て二日ぐらいいは、へこむこともある。誰でもみんな上がりっ放しはないでしょ。根本的なところを悩むんですよ。「オレはどっから来たんや、何のために生まれてきたんや」って。それこそが人生最大の悩みで。だから仕事で何かあった時でも、やっぱりそこを一番追求してしまう。へこむことは生涯直らないし、そんな時の歌を作ることは難しいことじゃない。ごく日常的な気持ちなんやから。
——ウルフルズではどうですか？
ヘラヘラ、キラキラした芸能な感じが条件で、曲がどうのこのじゃないんですよ。キャッチコピーが必要なんです。わかりやすいところだ

と「カッツだぜ!!」とか。実は歌詞では何も言っていないし、誰かを励ましてもない。もともとシャレで作った歌だから。でもリスナーは、それを何かの答えとして勝手に受け取ってるんよ。「受験勉強頑張りました」「彼と別れた今、あれを聴くんです」「やったりね。でも、「行けエー！行けエー！」って歌い続けてると、本当にこのまま行っているものかと考えもするわけ(笑)。
——心境が変化したんですか？
今年で42歳から、10代、20代の終わりの人よりは、自身が定まっちゃって。根本的には昔と同じやけど。18で大阪に出て来て、初めて住んだアパートには、共同廊下、薄暗い探電球で、歳とった管理人さん。イメージはすごく「男おいどん(作詞：松本零士)で、「ああ、押し入れに、ぎっしりキノコが生えてたな」みたいな(笑)。結局は積んできた経験によって、より固く生かされるかどうかでしょ。僕は僕の思う理想のトータス松本になりたい。どうしたらそうなるのかは明確には決められない、というより、決めたくないのかも。というより、決めたくないのかも。——ウルフルズとトータス松本にズレができたというご感想ですか？
ウルフルズは、永遠に大人じゃない。やりたいところがある。でも、せっかくなら曲を作って歌を歌うんやから、まだまだ見てみたい自分自身がいる。だから、バンドでは限界を感じたんです。自分のやりたいことだけをほめ込むには無理があるなって。4人でやってるし、みんなの気持ちは大事。だけど、メンバーがなくてこない、

似合わないじゃどうしようもない。度外視すると、ウルフルズじゃなくなるし。例えば、すごくシリアスな写真を撮ろうと思っても、ウルフルズの中にはシリアスな表情が似合わない人もいるからね(笑)。「こういう一面もあつたのかー」で、カッコ良ければ別やけど、やめときゃいいの。ってなるとダメでしょ。ウルフルズとしては、一つのカテゴリーや枠組みの中でやっていくんやけど、そこでやっても喜ばれない部分はソコでやるうと思ってる。やりたいことを自然にまかせながら、一番にイメージできることを今はやりたい。これまで僕はウルフルズで歌う自分の姿を想定し、他のメンバーがどう聴くかでしか考えてこなかった。だからこそ、これからの未知な部分でどういうふうにかがっていくか楽しみなんです。
——つまり、それは自由になった？
そろそろ、なりたかったんやない？(笑)。飽きたわけでも面倒くさいわけでもないけど、ハミ出たんですよ。歳をとるとどうしてもやりたいことが出てくるから。
——プライベート感を表現していくことにも難がありますね。
愛と平和の人になるのは嫌。だから、家庭のことを歌には出さない。喜ぶ人もおらへんやろうしね。アレはアレで感じ。もう、子どもと風呂にも入らへんし。あいつら、シユノールやおもちやを持ってきて遊ぶから長い。全然上がって来ないけど、未熟やからしょうがないけど、ただけは、ポイントとゆつくり風呂に入りたい。考え事もしながらね(笑)。